

# 文化としての方言・絆としての方言

－東日本大震災、被災地からの発信－

## 【宮城県報告】

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| 1. 取り組みの概要                     | 小林 隆、田附敏尚 |
| ● 『被災地方言研究文献目録』の作成と公開          |           |
| 2. 支援者、自治体職員、被災者の方言意識についての調査   | 武田 拓      |
| 3. 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』の作成と公開 | 川越めぐみ     |
| 4. Webサイト「東日本大震災と方言ネット」の構築     | 中西太郎      |

### 仙台会場

○日時：2013（平成25）年3月9日（土）13:30～16:40

○場所：仙台国際センター 3階 白樺2

### 東京会場

○日時：2013（平成25）年3月19日（火）13:30～16:40

○場所：一橋講堂 中会議場1

## 1. 取り組みの概要

この取り組みは、2012（平成24）年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（宮城県）」として行ったものである。

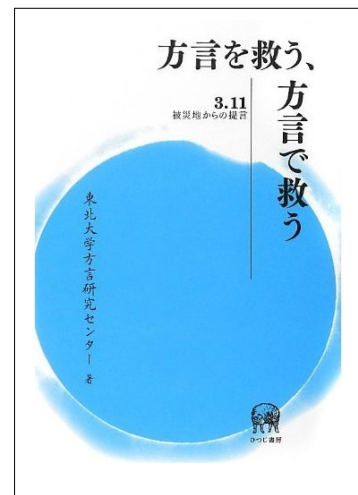
### 1. 1. 経緯と目的

東日本大震災における被災地域の方言の現状や問題点については、2011（平成23）年度文化庁委託事業報告書『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』（東北大学方言研究センター）に報告した。

これを受けて、本事業においては宮城県を中心とした被災地域において、人々の方言意識を調査し、方言の記録を開始するとともに、被災地域の方言に関する様々な情報を発信し、今後の活動のための基盤整備を行うことを目的とした。

### 1. 2. 事業の内容

- (1) 被災地域における方言の状況に関する調査及びその分析  
⇒ 小林隆ほか（2012）「東日本大震災と被災地の方言—東北大学方言研究センターの取り組み—」  
雑誌『日本語学』「特集災害とことば」への寄稿  
⇒ 東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う—3.11 被災地からの提言』（ひつじ書房）の刊行
- (2) 被災地域における方言話者や地域住民、自治体職員等に対する意識調査及びその分析  
⇒ 支援者、自治体職員、被災者の方言意識についての調査の実施
- (3) 消滅の危機に瀕していると考えられる方言の音声、映像を含めた資料の収集及び整理・分析  
⇒ 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集—宮城県沿岸15市町』の作成と公開
- (4) 被災地域における消滅の危機に瀕していると考えられる方言の現状把握のために必要な調査、データの作成及び方言の現状把握や保存継承に資するネットワークの構築  
⇒ 『被災地方言研究文献目録』の作成と公開  
⇒ 「東日本大震災と方言ネット」の構築と運用



(5) 調査研究結果に関する説明会等の実施

「震災の中で方言研究者ができること、なすべきこと」他ポスター発表4件

(2012年5月18日 日本方言研究会第94回研究発表会 千葉大学)

「言葉」で「つなぐ」

(2012年8月17日 日本語教育国際研究大会特別企画

「みんなのまちづくり—震災のあと行ってきたこと、これから行っていくこと」

『関連事例集 わたしたちのまちづくり』 名古屋大学)

「つなぐ言葉としての方言—被災者・支援者・そして研究者—」

(2012年9月1日 第30回社会言語科学会研究大会ワークショップ 東北大学)

「東日本大震災と方言に関する研究報告会—文化庁委託事業の進行状況—」

(2012年11月3日 文化庁委託事業研究報告会 富山市民プラザ)

「文化としての方言・絆としての方言—東日本大震災、被災地からの発信—」

(2013年3月9日 文化庁委託事業研究報告会 仙台会場：仙台国際センター

2013年3月19日 同上

東京会場：一橋講堂<学術総合センター>)

1. 3. 実施体制

代表者：小林隆（東北大学大学院文学研究科教授）

分担者：武田拓（仙台高等専門学校准教授）、櫛引祐希子（追手門学院大学講師）

幹事：中西太郎、田附敏尚、川越めぐみ（以上、東北大学産学官連携研究員）

協力者：椎名涉子、内間早俊、津田智史、魏ふく子、坂喜美佳、崔柳美、石山理恵、

小原雄次郎、佐藤亜実、袁晓犇、王卓、黄川川、蕭舒文、林芸濛、冷吟、

（以上、東北大学大学院文学研究科大学院生）、伊藤友香、刈間勇斗、柴田充、

福井幸、町田隆弘、三沢由季子（以上、東北大学文学部学生）

1. 4. 協力機関等

気仙沼市教育委員会生涯学習課、南三陸町教育委員会生涯学習課、法音寺（石巻市）、松巖寺（石巻市）、グランド・グレイス・プロジェクト、女川町教育委員会生涯学習課、東松島市教育委員会生涯学習課、東松島市コミュニティセンター、松島町教育委員会生涯学習班、利府町教育委員会生涯学習課、塩竈市教育委員会生涯学習課、塩竈市社会福祉協議会地域福祉課、多賀城市教育委員会事務局文化財課、七ヶ浜国際村国際交流係、仙台市若林区区民部まちづくり推進課、仙台市七郷市民センター、名取市方言を語り残そう会、岩沼市教育委員会生涯学習課市史編纂室、亘理町教育委員会生涯学習課、山元町教育委員会生涯学習課

## ●『被災地方言研究文献目録』の作成と公開

### 【目録作成の目的】

被災地※の方言研究に関する文献・資料（書籍、論文、市町村史）の情報を整理し、目録を作成した。この作成にあたっては、方言のこれからの記録に向けて、被災地の方言がどのように研究されてきたのかを把握することを目的とした。

東北大学方言研究センター（2012）『文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』（<http://www.sinsaihougen.jp/>センターの取り組み/文化庁委託事業報告書/）では、方言の記録・保存という観点から今後取り組むべき課題は何かを見出すため、目録を用いて文献・資料に関する分析を行っている。目録によって量的調査を行い、またこれらの文献・資料に目を通して、どのような分野、地域の研究がなされているのかを確認し、研究の不足している箇所について検討を行った。これについては東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う—3.11 被災地からの提言』（ひつじ書房）の第2章も参照されたい。

今年度は、上記の目録を大幅に改訂増補し、インターネットで公開する作業を行った。

※青森県、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県津波による被害を受けた太平洋岸、及び東京電力福島第一原子力発電所事故による避難指示区域並びに計画的避難地域、特定避難勧奨地点を含む市町村

### 【目録の作成にあたって】

目録の作成にあたって、どのように文献・資料を探したかを以下に記す。

- ①『20世紀方言研究の軌跡—文献総目録—』（日本方言研究会編、2005年、国書刊行会）  
だいたい明治期から2001年までの方言書目、方言論文（資料）がそれぞれ総記と地方（各県ごと）に分けて記載されている。2001年までの書籍、論文はこれをベースとした。
- ②『国語年鑑』1954～2009年版（国立国語研究所編、大日本図書）  
国語年鑑にはその年の刊行図書一覧、雑誌論文一覧があり、どちらともその中に「方言、民俗」という項目があるので、そこを見ると当該地域の書籍、文献があるかがわかる。  
①で探しきれない2002～2008年の書籍・論文はここで補った。
- ③ インターネット  
日本語情報資料館（<http://www6.ninjal.ac.jp/>）やCiNii（<http://ci.nii.ac.jp/>）などの学術文献データベースを用いて、「方言」「仙台」「宮城」などのキーワードで検索。上述の手順で取りこぼしがあった場合これで補完した。

なお、上述の探し方では、各被災地の市町村史にある方言資料はリストアップできず、個別に確認する必要が出てくる。これまで多数確認し、目録に掲載しているが、現在でもなおすべてを確認するには至っていない。

また、この探し方のどの方法でも確認・入手できていない資料も少なからずある。

一つには、①で確認したところでは存在するはずだが所在不明（掲載書誌不明）であるものがある。また、例えば2009年以降にX市Y地区の方言を集めた『Y地区のことば』という本が出版されていたとしても、③では市町村以下の地名での検索は基本的に行っていないため、リストアップされていない可能性もある。同様に『わが町の方言』のように《地名》が入っていないければ、これもリストアップされていない。

さらにこれらを補充し、内容の充実をはかることが今後の課題となる。

## 【目録の公開】

この目録は、2012年12月よりWebサイト「東日本大震災と方言ネット」にて配信している（<http://www.sinsaihougen.jp>/大震災と方言活動情報/研究者の方へ/被災地方言研究文献目録/）。ここでは、実際にダウンロードして利用するときの便を考え、ファイル形式もExcelとPDFの2種類を揃えている。現段階では利用制限なども設けていないため、多くの研究者の利用が望まれる。

### 書籍の場合

Total No.	県名	書籍/論文/市町村史	No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
29	青森	書籍	29	佐藤政五郎	1987	南部のことば 第二版増補新版	伊吉書院	196	八戸市	《記述的研究》方言集	『南部のことば』より4466語増補。
32	青森	書籍	32	岡田一二三	1996	みちのく 南部の方言	伊吉書院	?	?	?	未調査。

発行年順に並んでいます。  
(論文、市町村史も同じ。)

ページは総ページ数です。

該当する被災地が挙げられています。  
「地名(地名)」とあるのは、「現在の市町村名(旧市町村名)」です。  
(論文、市町村史も同じ。)

?は不明な箇所につけられています。  
(論文、市町村史も同じ。)

### 論文の場合

Total No.	県名	書籍/論文/市町村史	No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
40	青森	論文	4	内田武志	1934	青森県方言調査報告	土の音12-3(土俗趣味社)	46-71	八戸市 いらせ町(百石町)	《記述的研究》方言集	
43	青森	論文	7	宮良当社	1940	青森県秋田両県に於けるP音	[安藤教授還暦祝賀論文集]	1017-1040	全域	《記述的研究》音声(音声/音韻)	

「雑誌名xx-xx(発行所)」です。  
xx-xxの部分は巻号です。

論文が書籍に収録されている場合は、書籍名を〔 〕で括弧しています。

雑誌や書籍中の回ページに載っているかが示されています。( )で数字が括弧されている場合は論文の総ページ数です。

### 市町村史の場合

Total No.	県名	書籍/論文/市町村史	No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
108	青森	市町村史	1	正部家英	1977	階上町誌	階上町	799-830	階上町	《記述的研究》方言集	第五章 方言・訛語。

市町村史の回ページに載っているかが示されています。

「内容」は、以下のように分類されています。(書籍、論文も同じ。)

- ▼研究手法・対象分類
  - 《記述的研究》《地理的分布》《世代差》《グロットグラム》《共通語化》
- ▼内容分類
  - ・ 音声：(音声、音韻、アクセント、イントネーション、その他)
  - ・ 語彙：(意味・用法、その他)
  - ・ 方言集
  - ・ 文法：(文法概説、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、その他)
  - ・ 言語行動：(談話分析、表現など)
  - ・ 待遇表現：(敬語、その他)
  - ・ 談話資料
  - ・ その他：(方言意識など)

## 『被災地方言研究文献目録』の凡例

## 2. 支援者、自治体職員、被災者の方言意識についての調査

### 2. 1. 調査の目的

震災後1年半が経過し、現在求められる支援内容は、生活支援活動が中心になっている。それに伴い、被災者に寄り添い、的確にコミュニケーションをとるために、以下の2点を把握することを目的とする。

- ① 被災地での方言にまつわるコミュニケーションの問題
- ② 支援者のコミュニケーション環境や、被災地方言への意識

### 2. 2. 調査の概要

調査対象者

- ① 支援者3名（気仙沼市2、南三陸町1）
- ② 自治体職員6名（気仙沼市2、南三陸町1、石巻市1、岩沼市1、亶理町1）
- ③ 被災者4名（気仙沼市3、山元町1）

調査期間・方法

2012（平成24）年12月から2013（平成25）年2月にかけて、現地で面接調査を実施した。支援者、自治体職員、被災者それぞれ向けの調査票を作成したが、必ずしも全項目について網羅的に調査したわけではない。

### 2. 3. 調査結果のあらまし

#### <支援者>

- ・関東以西からの支援者からは、単語、特に地名の聞き取りに苦労したことがあるという回答があった。被災者との間に深刻な方言摩擦やトラブルがあったという回答はなかったものの、方言が理解できずに困ったという問題は起こっていた。
- ・聞き取れない場合、どうしても必要な場合以外はその場で聞き返して良いものか苦慮している。
- ・ある程度、被災地の方言を学んでから現地に行けると良い。実用以外にも被災者とコミュニケーションを取る際の話源として使える。そういった意味で、方言紹介のパンフレット作成については肯定的な意見が多かった。現場で使いやすい形式のものがよいという要望がある。

#### <自治体職員>

- ・地域それ自体、あるいは地域の文化や祭りの復興の取り組みが各地で始まっている。その過程では地域住民の団結のためにコミュニケーションが必要で、その媒介手段として

方言が一定の役割を果たしている。

- ・今回の調査で得られた回答には、避難先で方言による摩擦やトラブルの話聞いたというものはない。ただ、住民の避難先の多くが近隣であるという自治体の職員からの回答である。遠隔地への避難者については断言できない。

#### **<被災者>**

- ・震災後、親戚や地元の住民と話す機会が増え、結果として方言を使うことが多くなった。
- ・地元の方言による「がんばっぺ宮城」等のスローガンは、共通語によるものに比べ、実感がわくとのことで好意的である。関西、九州等の方言によるものも、その地域の人が見守ってくれていると感じられる点で同様である。
- ・方言はふるさとの文化であり、子孫に伝えたいという回答が多い。

## **2. 4. まとめと提言**

- ・地域や地域の伝統文化の復興のためには、住民を含む関係者の間に連帯感が欠かせないであろうし、逆に言えば連帯感がうまれることにより復興は加速すると思われる。コミュニケーション、言い換えれば「絆」のための媒介手段として、言語、すなわち方言が一定の役割を果たしていることが分かった。それゆえ、方言を子孫に伝える、記録しておくことにも肯定的な回答が得られた。
- ・支援者、特に遠方からの場合、被災地の方言はときとして分かりにくい部分があるものの、方言そのものを題材にして被災者とコミュニケーションを取るという側面があることから、もし時間的余裕があれば、事前に被災地の方言を学んでおきたい、という回答があった。それゆえ、方言パンフレット、会話集には一定の需要があることも分かった。
- ・今後、これらの実状を踏まえ、関係者の要望に応じるべく、方言研究に携わる者が、コミュニケーションにおける媒介手段としての方言に関わる諸問題に協力していければと思う。

### 3. 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』の作成と公開

#### 3. 1. どんな資料を作るべきか —被災地の方言会話集として

東日本大震災を受け、避難により被災地から人口が流出するにつれ、被災地の文化でありアイデンティティでもあると考えられる言葉、すなわち被災地の方言も危機的な状況に追い込まれるのではないかという懸念が持ち上がった。そのため、東北大学方言研究センターでは、被災地の方言会話を記録しておく必要があると考え、被災地方言会話集を作成することとした。この方言会話集は、東日本大震災後という特殊な状況の中、ただ記録するのみならず、被災地の支援にも役立てるのではないかという考え方のもと、次の3つのねらいを設け、作成した。

- ① 被災地の方言を記録し後世に「伝える」ことを目指す方言会話集
- ② 困難の中にある被災者を精神的に「励ます」ための方言会話集
- ③ 支援者が被災地の方言を「学ぶ」ことに役立てる方言会話集

①の「伝える」方言会話集としては、言うまでもなく、地域の文化でありアイデンティティでもある方言を記録し、伝えることを目的としているものである。これは従来の方言の記録とほぼ同じ目的を持ったものである。

②の被災者を「励ます」目的の方言会話集としては、避難により他地域での居住を余儀なくされた被災者の方々に、ふるさとの方言を読み、聞いてもらうことで、精神的に支えることができるのではないかという考え方から設けたものである。避難先において方言で話せる場所があえて設けられるほど、ふるさとの言葉が通じない、気軽に方言で話せる相手がないという環境においては、故郷の方言に接する機会が求められていたからである。

③の「学ぶ」ための方言会話集としては、これは支援者、ボランティアの方々のための方言の手引き、参考書という位置づけとなる。今回の東日本大震災の被災地は方言主流社会と言われ、方言色が強い地域だとされる。そのため、被災者と支援者の間において、方言が壁となりコミュニケーションがうまくいかないという事例が報告されている。それを解消するという試みからの目的の設定である。





### 3. 2. どのような工夫をしたか ー方法論上の特色

以上の3つの方言会話集としての機能を備えるため、この方言集では次の4点の工夫を施している。

- a. 収録地点の網羅性を求める立場から、宮城県沿岸部の15市町をすべて対象とすることにする。
- b. 会話のテーマとして、震災の体験等を設定することにより、現地の人々の震災体験を語り継ぎつつ、方言を後世に伝えることができるようにする。
- c. 目的別言語行動の枠組みに従った会話の収録方式をとることで、現地の言語生活を全体的、かつ、効率的に記録する。また、支援者にも、被災地の方言について手軽に学習してもらえようとする。
- d. インターネットでの公開を行うことで、全国に避難した被災者や日本各地から集まる支援者に、効果的にこの資料を利用してもらおう。

まず、aの収録地点についてであるが、宮城県においては、東日本大震災による人的被害は、津波の浸水地域に主に偏っている。むろん、宮城県全域において建物の倒壊などによる被害があるが、今回は宮城県沿岸の15市町を調査対象とした。避難者も多く、またボランティアなどの支援者が多く入り込んでいるのも、この沿岸地域である。

次に、b、cに関わるものとして、本方言会話集は大きく【自由会話】と【場面設定会話】の2種類の会話から成っている。【自由会話】には「震災のときのこと」「伝統文化について」「方言への思い入れ」の3つのテーマがある。本方言会話集に収録しているのは、各市町1テーマずつであるため、「震災のときのこと」が収録されているものが多い。「震災のときのこと」は震災の体験を普段話している言葉である方言で語ってもらうことで、方言の記録とともに震災の体験の記録という目的を持っている。また、より自然な方言の会話を収録するので、遠方へ避難されている被災者の方に聞いてもらうことで、精神的な支援となればというねらいもある。

【場面設定会話】は、朝、昼、夜のあいさつなどの会話の基本となる会話や、物の貸し借りや謝罪、勧誘など、13のテーマ（場面）を設定し、被調査者にその場面での会話を演技してもらうという形で収録を行った。自然さには若干欠けるかもしれないが、現地で行われている会話を、15市町共通の場面設定で収録することで、現地でのボランティアなどの支援に入る方が、その地域の方言を知りたいというニーズに応えることができるのではないかと考えた。

最後に、dのインターネット公開は、被災者、また支援者の方に、より手軽にこの方言会話集の情報に接してもらえように行ったものである。冊子型の方言会話集にはCD-ROMを付けたが、インターネットでも音声データを公開した。そのため、全国に避難した被災者の方、全国から訪れる支援者の方に、いつでも無料で、この方言会話集の音声も聞いてもらうことができる。このインターネットでの公開については、次節で詳細に説明を行う。

## 4. 「東日本大震災と方言ネット」の構築と運用

### 4. 1. 震災専用Webサイト構築の背景

現代では、インターネットによる情報の発信と共有が一般的となり、東日本大震災においても、Webサイトによる情報の発信が、被災地の情報を素早く、かつ、広範囲に伝え、支援のための活動を円滑なものにすることに役立った。このようなインターネットの長所は、方言に関する取り組みにも有効に機能するはずである。

以上のような背景を踏まえて、東北大学方言研究センターでは、震災専用Webサイト「東日本大震災と方言ネット」を立ち上げた（図1、2012年6月Webサイト開設）。



図1 東日本大震災と方言ネット トップページ

### 4. 2. 「東日本大震災と方言ネット」のねらい

被災地の方言に関する様々な情報を発信し、その情報を利用してもらい、多くの人々と共有する。その取り組みを通して、被災地の方言に対する社会的関心を高め、被災地復興の一助となることを目指す。

### 4. 3. 「東日本大震災と方言ネット」のコンテンツ

#### 4. 3. 1. コンテンツの全体像

- 当サイトについて
- 大震災と方言活動情報
  - ▼被災地の方へ

方言イベント情報／ふるさとの方言会話（※）／方言学の取り組み／助成金情報

▼支援者の方へ

見る、聞く、学ぶ、被災地の方言会話（※）／被災地の方言概説（宮城県）／支援者のための方言ツール（方言パンフレットなど）

▼研究者の方へ

研究会情報／被災地の方言研究文献目録／被災地調査スケジュール／大震災と方言に関わる研究論文／「大震災と方言」研究に関わるリンク集

○センターの取り組み

▼これからの取り組み

▼これまでの取り組み

伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集（※）／図書、報告書、研究論文、新聞記事等／報告会、研究発表等

○センター情報（メンバー・所在地） ○リンク（（東北大学関連・言語研究関連）

（2013年2月時のもの、※は実質的に同じ内容）

#### 4. 3. 2. 特色あるコンテンツ

- I. 支援者のための方言ツール（2012年6月から配信）
- II. 被災地調査スケジュール（2012年6月から配信）
- III. 被災地の方言研究文献目録（2012年12月から配信開始）
- IV. 伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集（図2、2013年1月から配信開始）



図2 「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」Webページ

#### 4. 4. 現在までの利用状況 (2012/06/01～2012/03/02)

**総訪問数： 2,535    総ユーザー数： 1,737**

☞ Web サイト開設時から漸次的に Web サイト訪問数が増え、「被災地の方言研究文献目録」や「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」を公開した 2012 年の年末から、特に訪問数の増加が目立っている。

##### 【地域別の観点での分析】

- ・ 宮城県の利用者が多い。
- ・ 東京都、神奈川県、大阪府、千葉県、福岡県、埼玉県、愛知県などの遠隔地の利用者が多い。

表 1. 都道府県別方言ネット訪問数

No	地域	訪問数	訪問別 ページビュー	訪問時の 平均滞在時間	新規訪問 の割合	No	地域	訪問数	訪問別 ページビュー	訪問時の 平均滞在時間	新規訪問 の割合
1	東京	1,048	4.27	0:47:14	70.99%	11	京都	36	2.89	0:44:58	86.11%
2	宮城	580	5.34	0:37:08	68.28%	12	北海道	27	3.44	0:03:02	59.26%
3	神奈川	86	4.71	0:08:45	93.02%	13	青森	23	2.74	0:12:42	86.96%
4	大阪	53	2.94	0:08:50	98.11%	14	茨城	21	3.81	0:02:21	90.48%
5	福島	51	3.31	0:09:11	94.12%	15	兵庫	21	3.57	0:02:59	100.00%
6	千葉	45	4.02	0:11:58	91.11%	16	山形	19	3.32	0:23:43	73.68%
7	岩手	42	4.36	0:07:41	69.05%	17	新潟	19	2.32	0:00:28	100.00%
8	福岡	42	2.62	0:12:26	97.62%	18	群馬	18	5.78	0:21:07	77.78%
9	埼玉	41	3.71	0:30:01	97.56%	19	静岡	16	4.31	0:06:30	87.50%
10	愛知	39	2.36	0:08:16	89.74%	20	広島	15	3.2	0:01:10	93.33%

☞ 方言をキーワードにしたさまざまな情報を利用してもらいながら、被災地の方言に対する社会的関心を高めてもらうという意図を、一定程度、達成できたものと考えられる。

#### 4. 5. 今後の課題

- ① 方言ネットによる情報発信の効果検証・評価
- ② ネットを使えない環境や人々への対応
- ③ Web サイトに掲載すべき情報の収集・強化
- ④ 次の災害に備えた「～災害と方言ネット」の準備